

図形刺激による自由連想についての研究 (Ⅱ)

古 矢 千 雪

A Study of Free Association with Shape Stimuli (Ⅱ)

Chiyuki FURUYA

前回の研究、図形刺激による自由連想についての研究 (Ⅰ) (本学紀要, 1977) は、主に図形刺激に対してどのような言語反応が現われるかを見るものであった。

今回は、前回の研究資料を追加する意味で、追試を行ない、さらに、被験者が刺激図に接した場合、その刺激をいかにとらえているか、という見地に立って反応内容を分析することにする。なお、前回の場合、刺激の呈示の仕方に問題があるように思われるので、今回は呈示方法を変えた。したがって、前回の連想反応

内容との違いがあれば検討を加えたい。

目 的

1) 前回の研究の追試を行い、前回の結果と比較検討する。

2) 被験者が呈示された刺激をどのようにとらえているか分析する。

方 法

1) 刺激図

前回用いたものと同一の刺激図 5 種類 (図 1 参照)

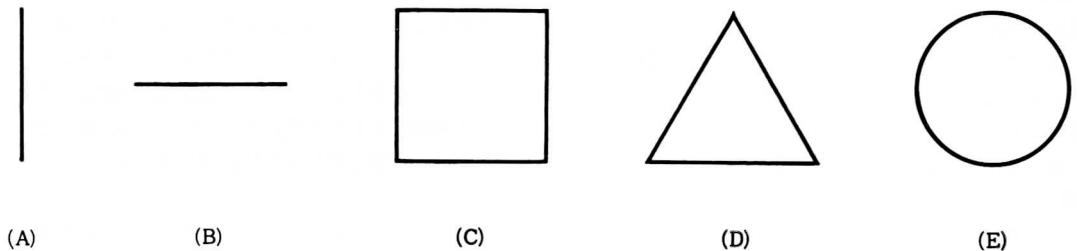


Fig. 1. Shape-stimulus (actual size)

2) 手続き

前回は刺激図の呈示方法が簡易すぎたので、今回改めることにした。

前回は 1 枚の西洋紙の上に 5 種類の図をランダムに印刷したものを被験者にわたし、被験者は各図を見て連想した言葉を余白に書いた。インストラクションで、図を見てすぐに思いついた言葉を書くように指示し、すぐ言葉が出てこない場合は、次の図に移るよう

注意した。この指示はかなり守られたように思われ、白紙回答のものも多くあった。しかし、5 種類の図が同時に見えることも連想に対する別の要因として考えられるため、今回は 1 つずつ刺激図を呈示することにした。

ほぼ 10cm 角の西洋紙の中央に 1 つずつ刺激図を印刷し、別に 1 枚、インストラクションに使用する図 (一見、花びらのような形) を印刷したものを作った。こ

れを表紙にし、刺激図の5枚は1セットずつランダムにならべ、6枚を一緒にとじた。したがって、被験者には異なった順序で刺激図がならぶことになる。

被験者に、表紙の図を用い、実験の目的である「図形刺激を見た場合何を連想するかについて調査していること」を告げ、記入の方法を説明した。さらに、表紙の下には同様のより単純な図が印刷されていること、1枚ずつページをめくり、図を見てすぐ頭に浮かんだ言葉のみを記入すること、何も連想されない場合は次の図に移り、後から逆もどりしないこと等厳重に注意した。

3) 被験者

女子短大生 270名(音楽学科 107名、被服・食物学科163名、前回の被験者とは異なる。)

結果と考察

1) データの処理について

連想された言葉を記入する際、初めに浮かんだ言葉のみ記入するよう注意しておいたが、2つ以上記入したものがあつた。この場合明らかに初めに書かれたと思われる言葉のみ採用し、記入した順が不明の場合は不採用とした。

連想内容については前回同様細かく報告するが、類似した内容は適時まとめていくことにする。

以下2)～14)の()内の数字は人数を表すものとし、数字の書かれていない言葉は、1人のものの反応であることを示す。

2) 図A(縦線)の連想内容について(総反応数245)

線(4), 境界線, センターライン

道(6), 糸, 雨

棒(34), マッチ(13), せんこう・鉛筆等小さい棒状のもの(27)

電柱(11), 柱(5), えんとつ(4), 木(3), 大木・くい等の大きな棒状のもの(7)

鼻

上から見たとって(2)

お金をたてて見たところ(4), 板

おはし1本, 線香1本, 1本の太木

地面に立ったくい

電柱の影, 黒鍵

細い

1(78), 数字(6), 1位・背番号といった1という数字から連想されたもの(8)

ついたて・区切りといった空間を区切るもの(5)

ボタンホール(6), 切りこみ・貯金箱の口・チャックをしめたところといったように切れ目としてみているもの(7)

1人だけで誰もいない, 空中の1本の柱

3) 図Aに対する前回の連想内容と、今回の連想内容との相違を調べると次のようになる。

線状や棒状に実際見えるものを連想したことや、数字の1, 区切りや切れ目を連想したのは両者とも差はなかった。

前回の反応にはあり、今回の反応にはないものでは、信念・すじの通った感じといった、刺激図を見た際線分がまっすぐであることからの連想、また、上にのびる・伸びようとする感じ等の動きを伴う連想、さらに、過去・夕暮・永遠の可能性・森等の1度何かを連想した後の2次的連想ではないと思われる反応内容である。

逆に今回新たに出て来たものでは、刺激図のみに対する連想ではなく、その図をかこむ空白部分までも含めて対象としている反応がある。「1人だけで誰もいない」と「空中の1本の柱」である。もっとも、ボタンホールや貯金箱の口といった反応も、空白部分をも含めて刺激図として見ていたとはいえるが、前の2つの反応の方が強く空白部分を意識しているように思われる。

また、前回の方が多くの出現した反応では、刺激図からうける感情的な反応がある。細い、おれそう、鋭い、素朴等の連想である。今回は、細いという反応のみであった。

逆に、刺激図を物体として見たのではなく、記号として見ている反応は、今回の方が多くみられた。

4) 図B(横線)の連想内容について(総反応数223)

線(7), 水平線(12), 地平線(5), その他の線(2)

道(3), ひも, 運動会のテープ, 廊下

棒あるいは〇〇の棒(25), マッチ(3), ものさし

(5), 鉛筆・しん・枝等の小さい棒状のもの (18)
橋 (3), 丸太橋, 丸太 (2), 平均台, 走り高とび
のバー

口 (5), まゆ (2)
へい

コインを横からみたところ (2), 本の横, 板 (7),
たな・台のように物を横からみているもの (8)

くぎが横にたおれている, たおれ木

黒い棒, 炭, 雪ダルマのまゆ, マジックで書いた字
走る列車

マイナス (22), ひく (3), いち (32), 数字・漢
字・計算等のように記号としてみているもの (8)

しゃ断機・通行止め・止まれ等といった空間を区切
るもの (8)

ボタンホール (13), 貯金箱の口 (6), つぶってい
る目, とじた口 (2)

何か穴がありそう, 穴

空中にういた床

無言

5) 図Bに対する前回の連想内容と, 今回の連想内
容との相違を調べると次のようになる。

図Aの場合と同様, 線状あるいは棒状に実際見える
ものを連想したケースがどちらも多く, また空間を区
切るものや何かの切れ目あるいはとじた状態のものを
連想したケースも同様にかなりみられた。

刺激図を記号としてみた反応は, 図A同様, 今回の
方が多くみられた。

前回には登場したものでは, 1本の線・1本の棒と
いう1つということにとらわれた反応, まっすぐな心
・すなおなといったまっすぐな線であることから連想
されたもの, 細い・かよい・きちっとしている等の
刺激図からうける感情的な反応が, あげられる。

逆に今回新たに現われたものは, 横たわっているこ
とを意識した反応や, 黒い色を意識した反応である。
また空白部分を含んだ反応では, 空中にういた床が1
例だけあった。

6) 4) の文中最後の行にある「無言」という反応
は, 刺激から直接1次的に出た反応ではなく, 一度例
えば「口をとじた状態」を思いうかべ, 2次的に「無
言」と反応したものと思われる。

このような反応, または分類をする際判断に困る反
応は, 以下同様に最後のグループにまとめることにす
る。

7) 図C (正方形) の連想内容について (総反応数
254)

四角 (14), 正方形, ます目

おり紙 (4), ガラス (3), ドア (9), センペイ・
ノート・ハガキ・ベース・フトン等のいわば四角い形
をしたもの (36)

敷地, コート, 花だん

口, 人の顔, 角ばった顔

サイコロ (14), つみ木 (7), 角ざとう (5), 箱
(22), トウフ (9), マス (7), この他四角い形を
した立体 (3)

部屋 (3), 家 (3), おり (2), お風呂
箱を上から見たところ, こたつ (3), 表賞台, 机,
えんとつ

トラックをうしろから見たところ (2)

窓 (64), 汽車の窓, ワク, 額ぶち

穴 (3), トンネル (4), 入口 (2), のぶき窓,
井戸 (2), この他穴や出入口としてみている反応
(12)

ドアがういている

部屋の空間, 空洞

マッチのパズル

8) 図Cに対する前回と今回の連想内容の相違は次
のようになる。

図A・Bと同様に, 前回はかなりみられた図に対す
る感情的な反応, 例えば, 安心感, どっしり, おちつ
いた, かたい等の連想は, 今度もみられなかった。

圧倒的に多い反応は, どちらの場合も, 実際にある
方向から見ると, 四角い形に見える物を連想したもの
である。

9) 他の図では現われず, 図Cの場合にのみ現われ
た反応がある。

前回の例でいうと, 狭い空間・とじこめられている
等であり, 今回の例では, 部屋の空間・空洞であるが,
これらの反応は, 刺激図の四角い枠の中の空間を意識
したものと思われる。図D・Eも同じく線で囲まれた
空間は存在するが, このような反応は出ていない。も

つとも、線 で 囲まれた空間部分を穴として見たものは、図C・D・Eともかなりある。しかし、穴としてみる場合と、あくまでも空間としてとらえる場合では、ニュアンスが違うと思う。

10) マッチのパズルという反応は、正方形をなしている1つ1つの線分を、独立したものとしてみたのではないかと思われる。4本のマッチで正方形を作っていると、パズルへと連想したと判断してよいであろう。

11) 図D (三角形) の連想内容について (総反応数245)

三角 (11), 三角形 (4), 三角定規 (8), 三角くじ・三角ぼうし等三角になにといった連想 (12)

おむすび (26), おでん (5), スカーフ・おり紙を切ったものといったいわば 三角の形をしているもの (11)

鼻 (4), ロボットの鼻, 鬼の鼻

つみ木 (18), 山 (43), ピラミッド (18), とんがり帽子 (3), 屋根 (5), この他三角の形をした立体 (3)

万華鏡 (8), 三角形の筒

三角柱を上からみたところ (2), 万華鏡の底, 棒の断面

トライアングル (19), クッキー型

山を登る, 口を三角にあけて歌う

記号, 標識 (10), 交通標識 (5), 地図の記号 (2), 三角点 (2), この他記号やマークとしてみているもの (5)

トンネル (2), 鉄砲穴, のぞき穴

ゆうれい, ヨット, 道, 遊園地, 未知のもの, ロボット, メトロノーム, 緑

12) 図Dに対する前回と今回の連想内容を比較すると次のようになる。

三角の形をなした物, あるいは, 平面図的に描けば三角の形をなす物を連想したケースが両者とも圧倒的に多い。

三角の枠としてみた反応, 記号やマークとしてみた反応は今回の方が多かった。

また他の図と同様, 安定している・鋭い・すっきりした等の感情的反応は, 前回のみであった。

13) 11) の最後のグループについて考察する。

ゆうれい・ヨットは, そのものは三角の形とは直接結びつかないが, ゆうれいの頭にある三角布, ヨットの三角帆が手掛りであろう。

道・遊園地は前回も登場した反応であるが, どのような連想過程を経て出てきたのであろうか。「道」については, 遠近法で描かれた道を思いうかべれば納得できなくはないが, 三角形の底辺が無視されたことになる。「遊園地」については説明がつかない。

この他, 「緑」は山を思いうかべたことから派生したのではないかと思われるが, 他は説明しがたい。

14) 図E (円) の連想内容について (総反応数258)

まる (20), 円 (3), 丸い〇〇という連想 (2)

水玉・10円玉・ボタン・コースター・お盆のように丸い形をしたもの (20)

口, 大きな口, 目, 目玉, ハゲ, 小鳥の頭, 丸顔ボール (39), あめ玉 (4), 風せん・卵・豆・電球・涙のように比較的小きな丸いもの (13)

太陽 (10), 夏の日太陽, 月 (35), 満月 (14), おぼろ月, 地球

望遠鏡 (2), ドラムカン, 筒, パイプ

ドラムカンを上からみたところ (2), 上からみた頭, 鉛筆のおしり, パイプの切り口

ゆびわ (18), 輪ゴム (8), 輪投げの輪・カーテンのリング・オリンピックの輪といったリングの形をなすもの (10)

とびはねているボール

0点, 出席……記号としてみた反応

穴 (26), 三角定規の穴 (2), トンネル, のぞき穴, マンホール

とばされた風せん

日の丸 (8), 日の丸の旗 (2)

お月見, 信号機, ワアッ, 円満, 平和, おばけ, タイムマシン

15) 図Eの連想内容について前回と今回を比較すると次のようになる。

今回新たに現われた傾向はなく, 今までの図同様, 感情的な反応はこの図の場合も現われなかった。ただ夏の日太陽・おぼろ月・平和・円満という反応はある面で感情的であるともいえる。

16) 14) の最後のグループの反応について考察すると、平和や円満という言葉は先にも述べた如く、まろやかであることから連想されたと思われる。

またお月見は月から、信号機はシグナルが丸い形をしていることからの連想であろう。

ワアッというのは、口を大きくあけた状態として図を見ているからだろうか。

タイムマシン・おばけについては、説明できない。

17) 以上、今回の連想内容の報告と、前回の連想内容との比較を行ってきた。5種類の図とも、前回と反応の傾向がほぼ一致しているといえなくもないが、いくつかの点で相違がみられた。大きな違いのみ、とりあげると、図からうける感情的な面を意識した連想、動きを伴った連想、またいわば2次的連想といえるものなどが多く現われたのが前回の方であるという点だ。

これは、被験者の違いが反応に表われたものとみるべきか、刺激の呈示方法が異なったため生じたものとみるべきか、断定できないが、どちらかといえば、呈示方法の違いから生じたと考えてよいと思う。

前回の被験者は、被服学科・食物学科に所属する女子短大生である。今回の被験者は、被服学科・食物学科・音楽学科に各々所属する女子短大生である。異なる点は、今回音楽学科の学生が加わったことであり、このことから、前回の反応に比べ、今回ユニークな反応が出てきたものであれば説明もつくが、事実は逆なのである。

したがって、両者の違いが呈示方法により生じたものと考えてよいのではないか。つまり、前回はインストラクションで注意があったとはいえ、かなりじっくり刺激図をながめ、反応を記入することができたのではないだろうか。それに比べ、今回はかなりスピーディに1枚ずつページをくらせ、反応を記入させたので、二次的連想は減少して当然である。だが、感情的な反応や動きを伴う反応が殆んど皆無に近いのはなぜであろう。感情的な反応や動きを伴う反応は、2次的連想として解釈すべきなのか、それとも、前回の被験者は、この実験の前に、なにか別の連想ゲームでも経験していたのであろうか。この点は考察できない。

18) 被験者が刺激図を呈示された時、その図をどの

ようにとらえたかという点に注意し、連想内容を大きく分類すると次のようになる。なおこの分類は、前回の連想反応を含めたもので行う。

図A（縦線）

a. 縦の線分にもかわらず、単に線あるいは何かの長いラインとしてみているもの。

b. 木や柱といった実際に立った状態にあるものも存在するが、立っていることにこだわらず、棒あるいは棒状のものとしてみているもの。

c. 上あるいは横といった見る方向によって棒状にみているもの。

e. 1つということにとらわれたもの。

f. 縦の線つまり立っていることにとらわれたものの。

g. まっすぐであることにとらわれたもの。

h. 黒いインキで印刷されているため、黒い色を特に意識したもの。

i. 図からうける感情的な面を意識したもの。

j. 図は静止したものであるにもかかわらず、動きを感じているもの。

k. 図を記号やマークとしてみているもの。

l. 図のみを見るのではなく、図をとりまく空白部分をも含めてとらえているもので、図をその内の空間を区切るものとしてみているもの。

m. 上の l. の場合と同様の見方をするもので、ただし図を切れ目としてみているもの。

o. 特に空白部分を強く意識した上で図をみているもの。

q. なんらかの連想過程を経て出てきたものと思われ、a～pまでのグループに分類する判断に困るもの。

図B（横線）

a. 水平線・地平線といった横に広がるライン、あるいは横の線に関係なく存在する何かのラインとしてみているもの。

b. 橋のように横たわった状態で存在するものもあるが、ほとんど横たわった状態とは関係なく、棒あるいは棒状のものとしてみている。

c. 図Aの場合と同じく、上あるいは横といった見る方向によって棒状にみているもの。

e. 図Aと同じく、1つということにとらわれたもの。

f. 図Aとは逆に、横の線つまり横たわっていることにとらわれたもの。

g. 図Aと同じく、まっすぐであることにとらわれたもの。

h. 図Aと同じく、黒い色を特に意識したもの。

i. 図Aと同じく、図からうける感情的な面を意識したもの。

j. 図Aと同じく、動きを感じているもの。

k. 図Aと同じく、記号やマークとしてみているもの。

l. 図Aと同じく、空間を区切るものとしてみているもの。

m. 図Aと同じく、図を切れ目としてみているもの。

o. 図Aと同じく、空白部分を強く意識したみかたをしているもの。

q. 図Aと同じく、a～pのグループに分類する判断に困るもの。

図C（正方形）

a. 正方形あるいは四角い形をしている物としてみているもの。どちらかというと平面的な感じが強いもの。

b. 立方体としてみているもの。

c. 図Aと同じく、見る方向によって四角い形に見えるもの。

d. 図A・Bには存在しないが、図を枠としてみているもの。

i. 図Aと同じく、図からうける感情的な面を意識したもの。

n. 図A・Bではm.のグループに相当するが、この場合は図を切れ目よりも大きく開いた穴としてみているものをいう。

o. 図Aと同じく、空白部分を強く意識したみかたをしているもの。

p. 他の図には存在しないもので、上のo.の場合は図以外の空白部分を強く意識したものであるが、この場合は、図の中の空白部分を特に意識したものである。

q. 図Aと同じく、a～pのグループに分類する判断に困るもの。

図D（三角形）

a. 三角形あるいは三角の形をしている物としてみているもの。どちらかというと平面的な感じが強いもの。

b. 三角垂や三角柱など立体的なものとしてみているもの。

c. 図Aと同じく、見る方向によって三角の形に見えるもの。

d. 図Cと同じく、枠としてみているもの。

i. 図Aと同じく、図からうける感情的な面を意識したもの。

j. 図Aと同じく、動きを感じているもの。

k. 図Aと同じく、記号やマークとしてみているもの。

n. 図Cと同じく、穴としてみているもの。

q. 図Aと同じく、a～pのグループに分類する判断に困るもの。

図E（円）

a. 円あるいは丸い形をしている物としてみているもの。どちらかというと平面的な感じが強いもの。

b. 球や円柱など立体的な物としてみているもの。

c. 図Aと同じく、見る方向によって丸い形に見えるもの。

d. 図Cと同じく、枠としてみているもの。

i. 図Aと同じく、図からうける感情的な面を意識したもの。

j. 図Aと同じく、動きを感じているもの。

k. 図Aと同じく、記号やマークとしてみているもの。

n. 図Cと同じく、穴としてみているもの。

o. 図Aと同じく、空白部分を意識しているもの。

o'. 上のo.と同じ見方をしているものだが、刺激図が偶然日本の国旗と同じ図柄になったため、日の丸・国旗といった反応をo.のグループとは区別した。

q. 図Aと同じく、a～pのグループに分類する判断に困るもの。

以上、被験者が刺激図をいかにとらえているかという点について、a～qの17に分類した。a・b・cの符号は、図A～Eに共通して同じ意味あいを示すものとなっている。

19) 上に述べたa～qの分類に従い、各図に対して生じた反応をまとめ、各グループごとの反応数を図示したのが次の図2～図6である。棒グラフの棒の外に記入された()内の数字は反応数を表わす。

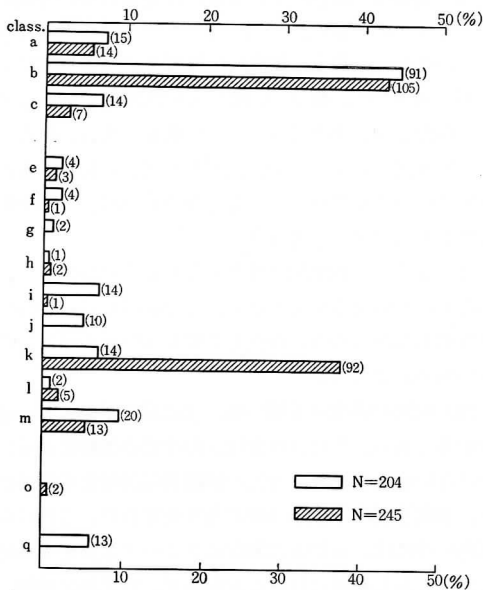


Fig. 2. The frequency of responses associated with fig. A. A white line: the last time. A black line: this time.

20) 図2～図6を総合的に検討すると次のようになる。

被験者は刺激図A・Bをほぼ同じとらえ方でみている。また図D・Eも傾向としてはほぼ似かよったとらえ方をしている。図Cはどちらかといえば、図Eに近いが、かなり異なった点もある。

図A・Bは線分であるため、他の図のように分類d(図を何か棒としてみる)は存在しない。また分類p(図の中の空白部分を特に意識した見方)も存在

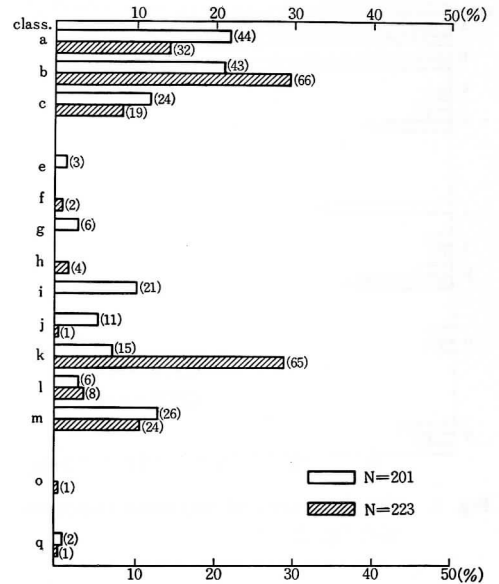


Fig. 3. The frequency of responses associated with fig. B.

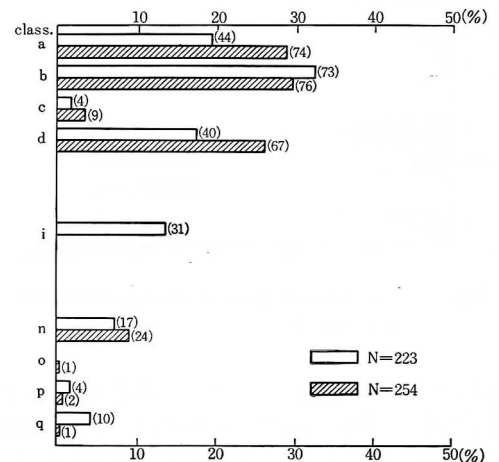


Fig. 4. The frequency of responses associated with fig. C.

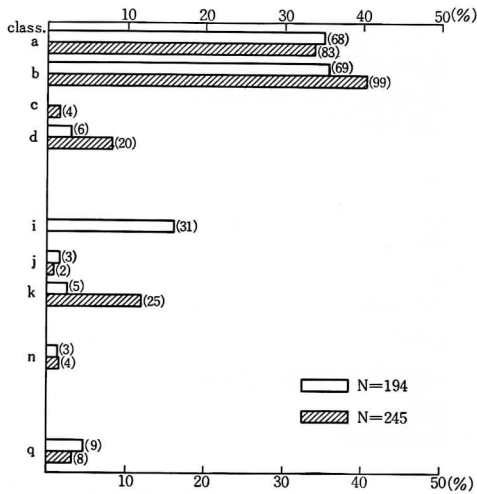


Fig. 5. The frequency of responses associated with fig. D.

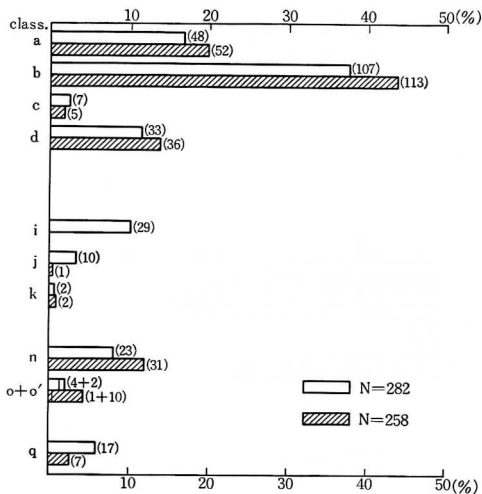


Fig. 6. The frequency of responses associated with fig. E.

しえない。分類 n（穴としてみる）に類似するのはこれらの場合分類 m（切れ目としてみる）である。刺激図が面積をもたないため、穴とみるよりも切れ目の程度の広がりとし、みなかったであろう。

刺激図 C・D・E に共通して登場しない分類は、e・

f・g・h である。図の性質上存在しえないのは分類 f（立っていること、あるいは横たわっていることを意識したもの）と分類 g（まっすぐであることにとらわれたもの）である。分類 e（1つということにとらわれたもの）や h（黒い色にとらわれたもの）は反応としては存在するものであるが、一般的な自由連想では出ないのであろうか。分類 l（空間を区切るものとしてみる）は、ことばの上では、この種類の連想は可能であるが、出現はかなり困難であろう。

他の刺激図には存在し、図 C には登場しない分類に j（動きを伴うもの）と k（記号やマークとしてみる）がある。分類 j は刺激図の性質上、つまり安定した形であるため、動きを感じるのは困難であることが、存在しない理由になろう。分類 k の場合、身近に正方形を使ったマークや、正方形が何かの記号を表わす例はないのであろうか。もし存在すれば、この分類の反応も出現するであろう。

このように、刺激図の性質上存在しえない反応や、存在しにくい反応があること、また前回からの実験では登場しなかったが、存在しえてもよい反応があることが明らかになった。

21) 前回の研究の考察の際、家政系の学生らしい連想が多くあり、それは日常生活の中での体験によるのではないかと述べた。今回の被験者には前にも述べたが、音楽学科の学生が 107 名含まれており、これらの反応の中には、前回とは異なるユニークな反応を期待した。しかし結果はほとんど変わらず、わずかに数例、音楽学科の学生らしい連想反応が存在した。黒鍵⁽¹⁾・管楽器のホール⁽¹⁾・口を三角にあけて歌っている⁽¹⁾・トライアングル⁽¹¹⁾であった。今回の被験者は、同じ年代の女子学生としての共通性の方が強いようである。

22) 被験者の性・年代・職業等が異なれば、連想内容は変化すると思われるが、刺激図のとらえ方もやはり異なってくるのであろうか。

この点を追求すれば、人間と物とのかかわり合いの一面も明らかになるのではないだろうか。

結 論

1) 全体的にみて極端に片寄った連想ではなく、前回同様、多方面にわたる内容の連想がみられた。

2) 前回に比較して、今回圧倒的に少なかった連想内容は、感情的なもの、動きを伴うもの、2 次的な連想と思われるものである。これらは、刺激の呈示方法の違いにより現われたものと思われる。

3) 逆に今回の方が増加した連想内容では、図を枠としてみるもの、記号やマークとしてみたもの等である。

4) 被験者が各々の刺激図をいかにとらえたかという点について分析したところ、今回までの反応としては登場していないが、存在しうる連想内容もあることが明らかになった。

5) 今回の被験者の中には音楽学科の学生が存在し

たが、連想内容に明らかな変化はみられなかった。同じ年代の女子学生としての共通性の方が強いようである。

6) 被験者の性質を変化させることにより、連想内容や刺激図のとらえ方の変化を検討すれば、人間と物とのかわり合いも、ある面で明らかになるであろう。

引用文献

古矢千雪：図形刺激による自由連想についての研究 (Ⅰ) 1977. 広島文化女子短期大学紀要 第10号

Abstract

This study is to re-examine the contents of free association with simple shape stimulus and analyze how to catch the shape of stimulus.

Method

Subjects. 270 students of women's junior college. (107 students of the musical course and 163 students of the domestic economy course.)

Experimental stimuli. See fig. 1. The same as the last study, but now printed one stimulus for each page.

Procedure. The subjects were instructed to look at the shape stimulus and record rapidly whatever comes into their mind.

Results

(1) As a whole, the contents of responses were the same as the results of the last study for the most part. But, the emotional associations, the associations with movement and the secondary associations were very few in this time. Conversely, something looked for a frame or mark increased in this time. For the reason, I think, the way of presenting stimulus was different in this time.

(2) There were a few characteristic responses of the subjects of the musical course. For example, black key, hole of a wing instrument and singing with open mouth like a triangle.

(3) According to the analysis of how to catch the stimulus, in other words, what the subjects pay attention to on the shape, the associations were classified into 17 groups. As the results for each stimulus, see fig. 2 to fig. 6.

Classification

- a. line or something linear (ex. borderline, sea line, road, thread and so on.)
- b. something like a stick (ex. match, pole, stick, yardstick and so on.)
- c. something took a view from the side (ex. standing coin, side of a book and so on.)
- d. something looked for a frame (ex. window, ring, triangle and so on.)
- e. one thing (ex. one big tree, one incense stick and so on.)
- f. something standing or lying (ex. standing pole, lying tree and so on.)
- g. straight (ex. straight road, frank, faith and so on.)
- h. black collar (ex. black key, black stick, charcoal and so on.)
- i. emotional response (ex. thin, sharp, cool, hard, calm and so on.)
- j. something with movement (ex. train going, going up a mountain, singing and so on.)
- k. sign or mark (ex. numeral letter, ichi in chinese characters, mark and so on.)
- l. partition (ex. screen, crossing gate, stop and so on.)
- m. break (ex. buttonhole, cut, close state, parted up and down and so on.)
- n. hole (ex. hole, tunnel, entrance, exit and so on.)
- o. including the ground (ex. floor in the air, flying balloon and so on.)
- o'. (ex. Japanese flag)
- p. blank in the frame (ex. empty, limited space and so on.)
- q. secondary association (ex. hospital, pleasure ground, peace and so on.)